

『理想のリスニング』（東京大学出版会）

はじめに

何から始めるか

英語の勉強はとりあえず何から始めるべきか？

こんな質問をよく受けます。語学の習得には手間と時間がかかる。なるべく効率的に事を進めたいと思う人も多いでしょう。手っ取り早く「スキル」を身につけたい。

しかし、「何から始めるべきか？」という問いに答えるのは容易ではありません。言語活動は、「言語」だけでは完結しない。たとえば感情や思考など、言葉の内にある複雑なものともかかわるし、社会の中で、相手に対しどう言葉を使うかなど外のことでも大事。語学を学んだのに「現実には使えなかったぞ！」といった苦情が絶えないのもそのためです。残念ながら、一定の知識を習得しても「よし、これでオッケー！」ということにはならない。

ただ、早めに準備すべきことは確実にあります。優先順位があるのです。たとえば言葉の意味を知らなければ、コミュニケーションにならない。最低限の単語は知っておきたい。また、言葉がどういう風に意味を生み出すか、その仕組みを知ることも必要でしょう。だから語句や構文の知識は必要となる。いわゆる文法の知識です。

単語と文法。古くから英語学習者に忌み嫌われてきた二つの言葉ですが、これらをしっかり習得しなければ語学の上達はありえません。逆に、基礎となる部分をしっかりやっておけば、ある段階からはぐっと楽になってきます。それこそ「現実の英語」を体験しながら、少しずつ前に進んでいける。

しかし、何年か前から、単語や文法をやっても「使える英語」が身につかないという声もあがってきました。そのせいか、「もう学校では文法を教えるな」「単語はおぼえるな」といった極端な意見も出てきました。学習指導要領まで、英語の授業で文法を教えることに対して抑制的になっています。ところが、そのせいで高等学校を卒業した人の英語力が落ちているとい

う声もあちこちから聞かれます。本来、英語力をあげようとしてとった政策が、反対に英語力の低下に結びついているというのだから皮肉です。

単語や文法を「悪者」に仕立てるのは行き過ぎでしょう。是正が必要です。ただ、前に戻せばいいというわけでもない。英語知識の習得のプロセスで、まだ十分に注目されていないものがある。本書で扱うのはそこです。

言葉と「運動」

私が注目したいのは、言語が「運動」だということです。口頭でやり取りするときはもちろん、読んだり書いたりするときも言葉はつねに動く。「読みやすい」「うまく書けない」といった感想を持つのも、言葉が時間の流れの中で「動くもの」として体験されるからです。

ただ、厄介なことに、言語によって時間の流れ方は異なります。英語にも日本語にも中国語にも、独自のリズムや間合いがある。だから、新しい言語を習得することは、**新しい時間の流れ方を学ぶ**ということを意味します。言ってみればそれは、すでに動いている乗り物に飛び乗るようなものです。ちょっと怖い。足がすくむのが当然です。エスカレーターに乗るのだって、はじめてのときは怖かったはず。イギリスのシェフィールド大学などには、今でも「パーテル・ノステル」（「われらの父」の意）と呼ばれる飛び乗り式のエレベーター（エスカレーターではありません！）が残っているところがありますが、これにはじめて乗るときにはちょっとドキドキします。だから、乗るときに「われらの父！救いたまえ！」という気持ちになるわけです。

別の比喩を使えば、英語と日本語では自転車に乗るかブランコに乗るかというような違いがある。力の入れ具合や身体の動きが異なるのです。英語が「早い」と感じるのも、この運動性の違いのためです。ブランコに乗っていると思ったら自転車だった、となれば、どうしていいかわからなくなるでしょう。

それぞれの言語特有の運動感覚を上手に身につけるためには、「聞く」という要素がとても助けになります。語彙や文法、構文などももちろん必須。でも、それとともにもっと上手にリスニングに取り組むことで上達の効率はよくなるのではないかと私は考えています。聞く練習は英語の運動感覚に慣れるための近道を提供してくれますし、ひいては単語や文法も含めた

「体幹部分」を鍛えることにもつながります。また、生涯にわたる言葉との付き合いのためにもとても有用です。おもしろいことに、「聞く」ことに注目すると私たちがそもそもなぜ語学の勉強をするのか、その意味がはっきりしてくるのです。残念ながら、そのことがまだ十分に理解されてはいない。とりわけ、日本ではそう。本書を書いたのは、このリスニングの潜在力を世に訴えるためです。日本語話者には英語の習得が困難だということが歴史的にすでに明らかです。なぜそうなったのか。リスニングに注目することでその原因を見つめなおせば、窮状の打破につながるかもしれません。

「4技能」でほんとうに「使える英語」？

2019年は以前にも増して「英語」が話題になった年でした。とりわけ大学入試への英語民間試験導入問題は混乱も大きかっただけに、おおいに世の注目を集めました。発端は、こんな意見でした。「このグローバル化の時代に、日本人はいつまでたっても英語がしゃべれない。悪いのは文章読解ばかりやらせる大学入試だ。いっそセンター試験をやめて民間試験に変えてしまえ」とそんな提案がなされたのです。「センター試験は2技能だけど、民間試験なら4技能のテスト。スピーキングもやる。これでしゃべれるようになるはずだ」というのです。

ご存じのようにこの政策は実施寸前になって頓挫しました。本格的な開始が近づくにつれて、民間試験の活用には驚くほど多くの課題があることが表沙汰になり、文科省もあれこれ対応を試みましたが、文科大臣の失言もあって、結局、見送りに追いこまれます。もし強行していたらかなりの混乱が起きたにちがいない。行政の不手際には振り回された受験生や高校の先生の間ではかなり不満が高まりました。

しかし、これはあくまで延期。制度設計をやり直し、何とか民間試験の導入を果たそうというのが文科省とその背後にいる政治家の希望のようです。依然として「4技能型のテストが必要だ」という声があるという。

たしかに今回の入試騒動で注目されたのは、主に公正さや公平さの問題でした。経済的地域的不公平さとあわせ、異なる民間試験を無理矢理紐づけることの難しさは誰が見ても明白でした。そのため、「運用面に課題はあったが、4技能という理念はまちがっておらず4技能を測る入試は必要」と言い続ける人はいる。

しかし、私はこの「4技能」という理念そのものにいささかの疑念を抱いています。この後につづく本文でも、英語の運用能力を別々に習得すべき技能として分断することの弊害に触れるつもりですが、その前に、ここでは「4技能」と「使える英語」や「実用英語」をめぐる考え方について整理しておこうと思います。どうも「4技能」をめぐる誤解はここから生まれていると感じられるからです。

英語の「本番」はどこ？

実用英語という理念が掲げられるようになったのは1970年代のことです。もはや用語としては古臭く聞こえますが、「使える英語を学ぼう、教えよう」という言い方をする人はまだおられます。「4技能」という考え方の背後にも、「英語の運用を四つにわけてそれぞれテストすれば、使える英語が身につく」という発想があるようです。今回、政策を推進しようとした人はみな判で押したようにこの「4技能」というフレーズを口にしましたし、慎重派や反対派の中にも「4技能という理念はまちがっていない」と言う方は相当数おられました。念頭にあるのは、「現実の英語」という理想です。英語の勉強も試験も「現実の英語」に似せるべきだ、という考えがある。当然と言えば、当然です。「現実の英語」とかけ離れたことをやっても「現実」には使えない、と考えたくなる。

しかし、この「本番に似たことをやれば、本番もきつとうまくいく」という理屈には限界があります。スポーツでいえば、試合形式の練習ばかりやっても上達しない。より大事な部分を鍛えるための訓練も必要です。土台となる筋力がついていなければ、いくら実戦形式の練習をやっても成果はあがりません。受験生にとってよりわかりやすい例でいえば、志望校の赤本に載っている過去問を解くだけでは、決して学力があがらない。芯となる学力をつける方法は別のところにある。こうしたことは受験生なら誰でも知っていることです。

言葉は複雑です。「英語の現実」とは言っても、言葉を実際に使う状況を再現するのはかなり難しい。それだけに、現実^{じゆんじつ}に似せて練習したり、テストしたりすることがいつも合理的だとは限りません。たとえば聞くテストにしても、書くテストにしても、その設定はあくまで人工的で、実際に私たちが直面する「現実の英語」の状況からはかけ離れている。その度合いがもっとも甚だしいのは話すテストでしょう。話すテストではタブレットに向かい、キーワードを

用いて一分間で言えるだけのことを言いなさい、というような課題設定がなされますが、これは「現実の英語」ではまず起きない不自然な状況でしょう。

テストへの過信は禁物です。この数十年、私たちはテストを現実にも似せることに注力してきました。しかし、果たして私たちがほんとうに「現実の英語」をとらえたかというとおおいに疑問です。レストランに行くとか、遊園地のチケットを買うといった表向きだけの「実用らしさ」を設問に組み込めば一件落着と考えるのは、安易ではないでしょうか。

この三十年ほど流行してきたコミュニカティブ・アプローチは、なるべく「現実」の運用の中で自然に英語を身につけさせることを目指す方法です。教員の能力やクラスサイズなど一定の条件がそろえば、ある程度の効果は見こめると私も思いますが、これは決して唯一絶対の方法ではありません。ましてや日本の教室でこの方法にしがみつくことの弊害にはもう少し目を向けてもいいでしょう。

今、私がとりわけ必要だと思うのは、日本語話者のためにこそ用意された習得の方法です。日本語話者は長いこと英語習得に失敗しつづけてきた。どうやら特注品が必要なのです。そのためには「現実の英語」に似せて勉強させねばならないという「ミメシス幻想」（「ミメシス」とは「模倣」の意）からいったん自由になりたい。私たちは目先の現実や体験にとらわれることなく、より上手に現実に対処する方法をふだんから身につけています。スポーツでいえば筋トレや千本ノックのような集中的な特訓にあたる練習を、語学についても実践すべきでしょう。「現実の英語」に似せようとすればするほど、私たちはかえって「現実の英語」から遠ざかってしまう可能性があるのです。

4 技能「均等」は可能か？

もう一つ。私たちがどんな英語を目指したいのかということもあらためて確認する必要があります。入試改革に合わせて繰り返された「4技能均等」という理念には、とりあえず満遍なくいろんなことができるというイメージがある。家電製品でいえば、「オールインワン」とか「多機能」「複合機」といった売り文句と似ています。しかし、この「4技能」という理念の土台にある、「均等」といった考えにはおかしい点もあります。

日本語の場合で考えてみましょう。私たちの4技能は果たして「均等」なのでしょうか。た

たとえば自分が読むものを、自分でも書けるという人がどれくらいいるか。教科書や辞書やエッセイを読んでも、そうしたものを自分でも同じように書けるという人はそんなにいません。ニュース番組や演説なども、聴いて理解はできても自分ではふつうはしゃべれない。つまり、母語でさえ、言語運用能力はでこぼこなのです。四つの技能は「バランスよく」でも「均等」でもない。ましてや英語でそれが「均等」になるなどというのは、実現不可能なファンタジー。このように「4技能」という理念は、土台の部分があやふやなまま掲げられてきたのです。「現実の英語」を目指したはずなのに、その「現実」からかけ離れている。あらためて考えてみると、4技能を均等に身につけた人のイメージは、ほとんど人造人間のような不自然さしかもちません。

こうした無理な「均等」の理念を掲げ続けければ、結局、母語話者モデルに行きつくしかないでしょう。「すべての技能を均等に習得するというのはかなわないから、ネイティブ・スピーカーのようなバランスを目指せばいい」という話になるわけです。今回、異なる業者テストを比べるための指標となる予定だったCEFR(欧州共通参照枠)にも、そうした理想が見え隠れします。

しかし、日本の英語教育は果たして、それでいいのでしょうか。日本における「英語の現実」を考えてみましょう。日常生活ではほとんど英語に触れない。一年に一度でも英語を使う人は、全人口のごく一部です。その状況で、実現不可能な「母語話者モデル」をめざして意味があるのでしょうか。合理的な根拠が見えません。そもそも外国語を母語話者並みのレベルにもっていくのはとてもたいへんです。母語と外国語では活用される脳の部位が違うという研究もある。¹多くの人は割ける時間も、上達可能性も、使用目的も限られているのですから、自分にとって役に立つ力をこそ伸ばすべきではないでしょうか。語学もダイバーシティの時代です。拘り定規な「均等理念」の押しつけは時代錯誤的です。

ポスト4技能の時代

将来、「グローバル人材」となる人は英語を使う可能性は高いでしょう。しかし、たとえ同じように「グローバル人材」であっても、どのような場でどのように英語を使うかは、人によって異なる。国連で活躍する「グローバル人材」もいれば、ユニクロの海外支店で働く「グロ

ーバル人材」もいる。中にはハワイでおむすび屋さんをやる「グローバル人材」もいるでしょう。こうした広範なグローバル人材の領域をすべてを学校教育でカバーするのはとても無理です。ならば、まずは芯となる体幹部分を鍛え、その先は必要に応じて自分で磨くというプランを立てる方が合理的でしょう。学校段階で、形だけの「実用英語」や「グローバル英語」を掲げても、先にはつながりません。

4技能を連呼すればいい時代は終わりました。英語の運用方法は4つどころか、7つだとか、もっと細かく10～20に分けた方がいいといった意見もあります。杓子定規な「4」にこだわることに意味はありません。これからはポスト4技能の時代。英語学習の整理の仕方が多様で力点の置き方もさまざまなのが当然。「自分はプレゼンの練習が大事だと思う」「いや、何と言っても精読でしょう」「究極はラブレターの書き方」などなどいろんな主張があっただけか、かしくない。語学にはその人なりの入り口があるのです。

とはいえ、言語能力は四つバラバラになどなっていないので、どの入り口から入っても、いずれ「体幹部分」にたどり着かざるをえないし、他の「技能」との連携も嫌でも体験する。私が本書で示すのはリスニングを入り口としたものですが、もちろん、読むこと、書くこと、読むことも連動する。それはあくまで数ある入り口の一つだということです。もっと自分にぴったりの入り口もあるかもしれません。そういう意味では「理想のスピーキング」とか「理想の英単語」といった本があってもいいのですが、ひとまずは私なりのこだわりをもって、なぜリスニングなのかを説明していきたいと思います。

本書の概要

本書は理論篇と技術篇の二部で構成されています。どの章から読み始めても大丈夫な書き方をしていますので、目次を確認の上、興味を持ってそうな頁から繰っていただければ幸いです。以下に概要をまとめます。

理論篇では、まず第1章と第2章で、なぜリスニングを重視する必要があるかを説明します。その際、導入のために言葉の「うまさ」「心地良さ」といった点に注目します。これにつづけて第3章ではリスニングを強化するとどのような利点があるかを、コミュニケーションにおける「強さ」という概念にからめて考えます。第4章ではそれをどう学習過程に取りこむかを検

討します。今、流行しているのは「グローバル・スタンダード」というフレーズですが、もしほんとうに日本語話者ばかりが英語で苦勞するとするなら、そうした汎用モデルの学習法では十分ではないということになります。むしろ日本語話者向けのテイラーメイドの学習法について考えたい。この章では「1点聞き」を活用しつつ、切れ目の勤の養い方についても解説します。第5章では「耳の記憶」を鍛える練習法、第6章では身体や空間感覚という切り口で提案をします。主張したいのは、「実用英語」という考えにはもはやあまり有用性がなく、「実存英語」という見方が必要だということです。第7章はもう少し巨視的なスタンスから、なぜそもそも私たちは言葉を聞こうとするのかという視点で、「聞き届け」という行為に注目します。これが、本書の最終テーマでもある「人間を聞く」という話につながっていきます。

技術編では、理論篇で触れたいくつかの問題について、より詳しく技術的に扱い、具体的な練習法などについて提案します。第8章ではリスニングと「切れ目」のとらえ方に、第9章ではストレス・アクセントの「山」のとらえ方に、第10章では「名前」の聞き方、第11章では身体と空間にフォーカスします。本書の副題にも入れた「人間を聞く」という理想については、第7章とあわせ、この第12章にもまとめてあります。

本書は「聞くこと」を扱っていますので、音声素材も利用します。「」印のところでは、示されたリンクに行っていただくと音声による解説や例題などが聞けるようになっていますので、是非、ご活用ください。

むろん、本書は「これだけでばっちり！」というような網羅的なものではなく、練習のためのアイデアを提供する場だとお考えください。リスニングについて、何をすればいいかは本書である程度説明してありますが、あとは実践。現在、ネット上にも英語の音源はあふれています。いくらでも無料でリスニングの練習はできます。そんな中で、よりおもしろく、かつ効率的なやり方がこれからも提案されるでしょう。そうした方法を共有できるような場もいずれは作られるのではないかと期待しています。

【はじめにのポイント】

- ・ 学習の優先順位
- ・ 4技能の限界
- ・ これからの英語学習

ⁱ 中森誉之『技能を統合した英語学習のすすめ ― 小学校・中学校・高等学校での工夫と留意』(ひつじ書房 2018)、17頁。